

デズバの風

文Ⅱ工藤律子 写真Ⅱ篠田有史

シニア世代が伝える
ものづくりの醍醐味



木村芙美世さん
Kimura Fumiyo

岡田剛さん
Okada Tsuyoshi

メキシコ南部のオアハカ州は、山々に囲まれた盆地に先住民の伝統が息づく、魅力的な地域。だが、文化的豊かさの陰で、経済的貧困が人々の生活を脅かす。この現実を少しでも改善しようと奮闘する2人のシニア海外ボランティアを紹介する。

女性に服飾デザインを指導

「オアハカの女性たちは代々、自分の村独自の刺繍を、おばあちゃんから教わるんです。だから、その刺繍を生かしたもののづくりを考えています」

刺繍で飾られたドレスを前に、木村芙美世さんが言う。木村さんは2007年7月からシニア海外ボランティアとして、州都オアハカ市から車で30分の職業訓練校で、女性たちにデザインと型紙作り、縫製を教える。

シニア海外ボランティアとして活動するのは3度目だ。これまでの派遣国（ホンジュラス、ドミニカ共和国）もすべてスペイン語圏。最初は、ラテンの大きな気質が「私に似ている」と気に入ったが、次第に人々が「時間を守らない」ことに悩まされるようになった。「この学校でも、最初は校舎の鍵を開ける人までが遅刻ばかりで」と苦笑する。

木村さんは40年以上、服飾デザインと洋裁の仕事をしてきたベテランだ。職業訓練校の生徒は、半分以上がすでに洋裁指導者として働く女性であるため、「初めは、プロだと思っっている人たちのプライドを傷つけずに指導するのが、大変でした」と話す。

短期講習で資格を取っただけの「プロ」を含め、生徒たちは皆、仕上げの丁寧さやデザインの独創性に欠けていた。が、次第に自分の欠点を認め、学習意欲を高めると、ぐんぐん上達。コース終了時に開いたファッションショーでは、自分の作品を身にまとい、誇らしげにステージを歩いた。デザインが好評で仕立ての注文が来た人や、作品自体が売れた人も。

「先生には技術だけでなく、思いやりの心を教えられました。教える糧に自己実現していきたい。希望をつかんだ女性たちは貧困を脱し、経済的に自立することを目指す。」

「みんな本当は大変な家庭事情を抱えているのに、忍耐強く、よく頑張ってくれました」。自身も働く母親である木村さんは、オアハカの女性たちが自信を手により良い生活を勝ち取っていくことを、心から願っている。

もっと売れる陶芸品を

美しい刺繍製品と並び、オアハカで有名な民芸品といえば、陶器。素朴な色、形の皿やつぼが観光客に人気だ。しかし、「デザインはバラバラで、品

質管理もされていない。食器として売るには、均一な物を高品質で作ることが大切なのですが」

そう話す岡田剛さんは、磁器デザインを教えるシニア海外ボランティア。2つの職業訓練校で、工業製品として販売できる食器作りの人材育成に携わる。伝統技術に新しい製造技術を導入して地場産業に育て上げる試みだ。赴任後、デザインだけでなく、釉薬の使い方や焼き方、果ては窯の作り方で指導することになり、「料理（デザイン）を作りに来たのに、鍋（窯）を作るようになった」と笑う。

岡田さんはサラリーマン時代に一度、JICAの短期専門家として、ハンガリーで磁器の品質管理を指導した経験がある。会社を退職した翌年の07年にここへ来た。普段はオアハカ市からバスで5時間の小さな町イステベックに暮らし、地元訓練校の生徒3人を指導、月に1度オアハカ市内の学校で教える。

生徒たちは主に、伝統陶芸品を作る家庭の若者だ。設備の不十分な環境で、若者たちに慣れないスペイン語で根気よく指導する岡田さんの姿は、まさに「マエストロ（師匠）」。「日本で1カ月の仕事で、ここでは半年

PROFILE

木村芙美世 きむら・ふみよ
1941年静岡県出身。文化服装学院卒。学校の講師や衣料品会社のデザイナーなどを務めた後、ドレスメーカー教室を開く。シニア海外ボランティアとして2001～02年ホンジュラスでドレスメーカーを、04～06年ドミニカ共和国で型紙作りを指導。07年7月～08年10月までメキシコで活動。

岡田剛 おかだ・つよし
1949年山口県出身。同志社大学工学部工業化学科卒。エネルギー管理士、公害防止主任管理者、高圧ガス作業主任者、大気関係公害防止管理者の資格を持つ。2006年まで日本陶器（株）に勤務。95年にJICA短期専門家としてハンガリーに赴任。07年7月～09年3月までメキシコで活動。

かかる。問題があっても、すぐに解決しようと思わないのは困る」と嘆きながらも、「彼らは作る技術は持っているが、作った物をもっと売ってもらいたいね。売れると、また頑張ろうと思うから」と期待を述べる。その思いを感じ取ってか、生徒の一部は、食器製造販売の小さな会社の設立を計画 중이다。夢をかなえるためにも、「無鉛の安い材料を使って、いかに均一の物を作りだすかが課題」とマエストロは先を見つめる。

木村さんと岡田さんの生徒たちが製作したランチョンマットとスープ皿をプレゼント！ 詳細は34-35ページをご覧ください。



生徒が窯に入れる作品を確認する岡田さん。いいところは褒め、直すべきことはきちんと指摘、のんびり気質の生徒たちにハッパを掛ける



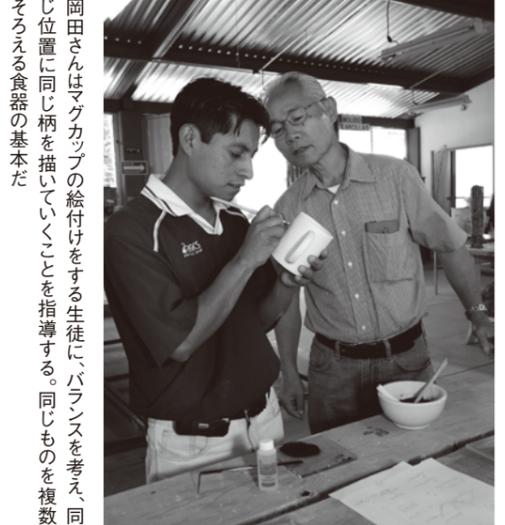
自らの作品を身にまとい、あるいは子どもに着せて、誇らしげにポーズする生徒たちに囲まれ、木村さんも幸せそうだ



伝統的な刺繍を施した布を、ランチョンマットに仕立てる生徒に、木村さんは褒め言葉を掛け、彼女たちの頑張りを引き出している



生徒たちと木村さん（中央）。若い初心者も、頑固な「洋裁のプロ」の中年女性も、今では皆、思いやりを持って指導する「木村先生」のファンだ。



岡田さんはマグカップの絵付けをする生徒に、バランスを考え、同じ位置に同じ柄を描いていくことを指導する。同じものを複数そろえる食器の基本だ